

位置と環境

喜念貝塚は、喜念小学校の南側から南西部にかけての海岸砂浜の上に形成され、前面に広いサンゴ礁背後に低湿地、そのさらに背後には台地状の地形が広がり、海岸までは、約50～60mを距てている。

この辺一帯の海岸に発達した砂浜は水蝕をうけて切れ、その内側斜面の地点において貝層の露出がみられる。

調査の経緯

昭和7年に地主の松田松栄により発見された。同8年廣瀬祐良，同10年三宅宗悦，同31年九学会連合奄美大島共同調査委員会考古班等により調査が実施された。

三宅宗悦の調査においては、土器、小児人骨・珊瑚礁製の敲石・貝輪等が、九学会の調査では、宇宿上層式土器が主で、上層沈線文土器・細隆起文土器・磨製石斧片・牙製飾等の出土報告がなされている。

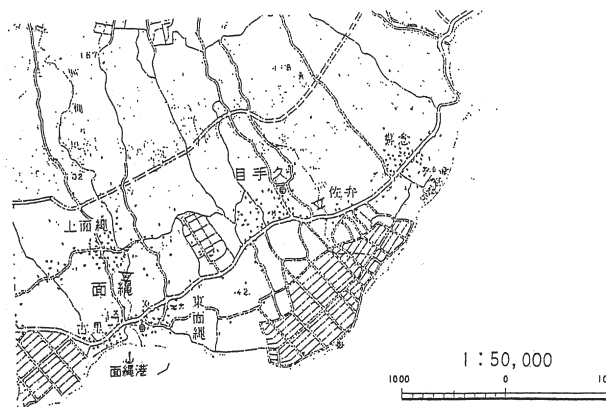
遺構と遺物

貝層露出地点を試掘した結果、地表より約20cm砂層、以下40cmが黒褐色遺物含砂層（混土貝層）、その下層は約20cm砂層、最下に20cmの黒褐色遺物包含砂層（混土貝層）があって、それ以下は純砂層である。

土器は、褐色の粗い造りで、口縁部が蒲鉾形あるいは断面三角形の肥厚を有し、胴部の張った尖底あるいは丸底の土器で、宇宿上層式と称したものが最も多く、同様の型式で口縁部から胴部へかけて、一部に縦線を施したものの、あるいは口縁部が波状の隆起をなして同様の器形と思われる土器で、縦または横にみみずばれ状の隆起線を施し、その両側または片側に刺突した列点を並べたものも少量出土している。

特徴

喜念貝塚は、宇宿上層の時期のものを主体としていく分下層の時期に近い遺物を出土している。これは面縄貝塚の西側洞窟上層の遺物とも一致する。



第1図 喜念貝塚の位置

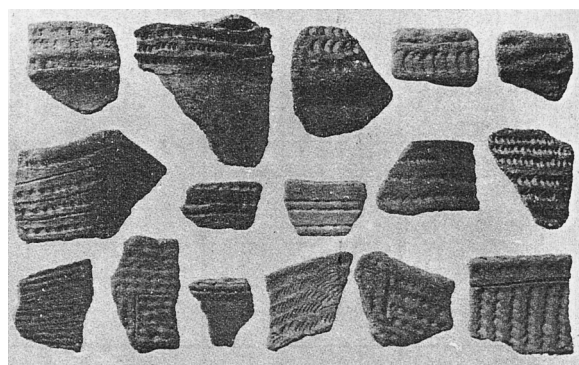
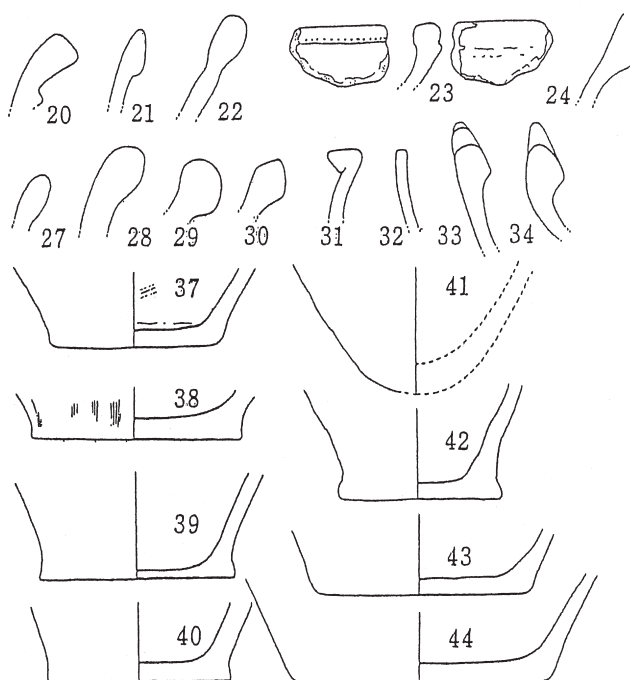


写真1 喜念貝塚下層出土土器片



第2図 喜念貝塚下層出土（土器）

昭和50年の伊仙町大水害の際、包含層の一部が露呈し、これまで判明していた宇宿下層式の遺物包含層の最下部にもう一層あることが判明した。その他、多数の宇宿下層式土器・貝製品等が発見されている。また砂浜北側で貝札も表採されている。

資料の所在

出土遺物は、伊仙町歴史民俗資料館に保管・展示されている。

参考文献

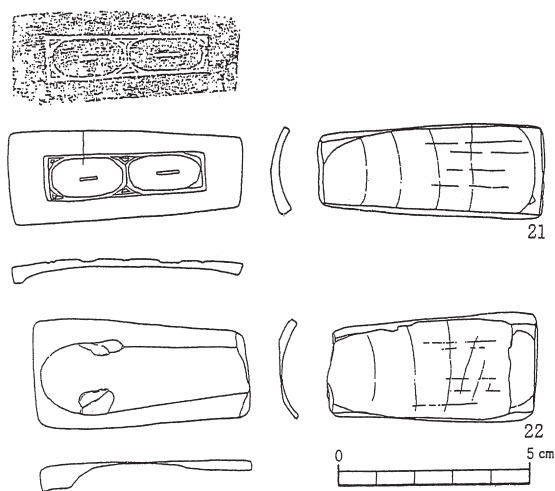
三宅宗悦1941「南島の先史時代」『奄美（自然と文化）』

河口貞徳1974「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』第9号，鹿児島考古学会

伊仙町1978『伊仙町誌』

白木原和美1976「徳之島伊仙町総合学術調査報告書」『南日本文化』第9号

(伊藤勝徳)



第3図 喜念貝塚表採貝札

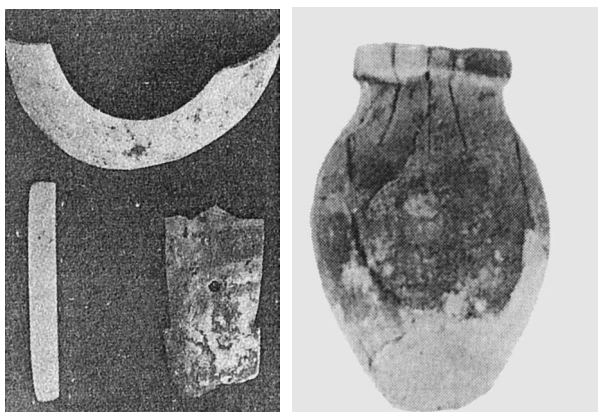
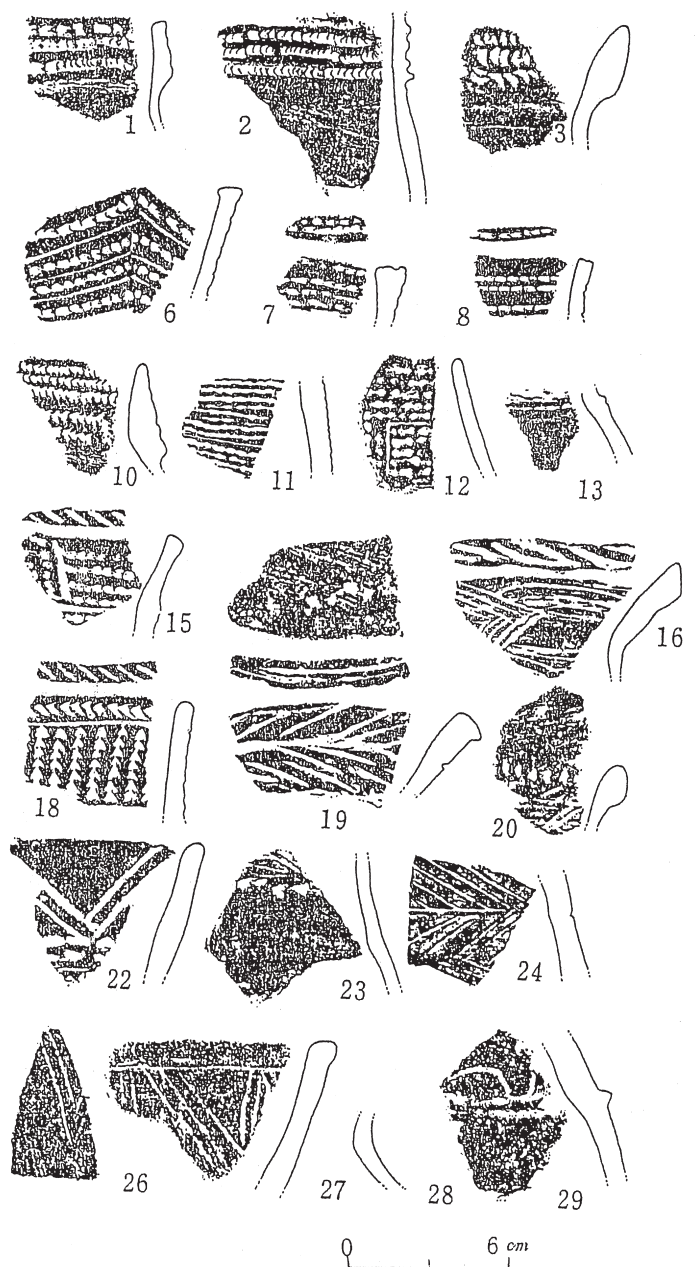


写真2 喜念貝塚出土（貝製品）（河口貞徳写真提供）



第4図 喜念貝塚出土（土器）